

京都とオアシスとクリオコナイト

竹内 望 (千葉大学)

アラスカから京都へ

2002年2月、約2年を過ごしたアラスカを離れ、京都に引っ越してきた。総合地球環境学研究所に採用され、オアシスプロジェクトに携わるためである。私の専門は、氷河の上に生息する雪氷生物の研究である。氷河の上には寒くても生きていける変わった虫や微生物が生きている。彼らが氷河でどんな生活をしているかを調べることが私の仕事である。そんな浮世離れした研究をしている私が、なぜ総合地球環境学研究所に採用され、しかも中国の砂漠の環境問題のプロジェクトの事務局をやるのか？ 雪氷生物が地球環境問題、砂漠化といったなんの関係があるのか？ 普通、冷静に考えれば、とても不思議でよくわからない。自分でも聞かれたら納得できる答えをいえる自信はなかった。実際、はじめてまたぐ地球研の敷居は、とても高く感じた。はたして私がこんなところにきていいのだろうか？ やっていけるのだろうか？ そして京都という場所が、さらに私の不安に拍車をかけた。関東生まれの私にとって、そこはアラスカ以上に外国だった。お茶漬けをすすめられても絶対にごちそうになってはいけない、そう何度も頭の中で繰り返しながら、京都での生活がスタートした。すむ場所も研究もすべてが異次元空間に迷い込んだようだった。

地球研と地球環境問題

氷河の研究にかかわっていたため、地球環境問題という言葉は、たしかに聞き慣れてはいた。アラスカでのプロジェクトも、これからの地球温暖化で北極圏がどうなっていくか、というものだったので、これも一種の環境問題のプロジェクトではあった。しかし、地球研にきてまずおどろいたことは、そんなのは問題のごく一部であるということだった。歴史、文化、社会、経済などの話をきくとたしかに人間なしでの地球環境問題などありえない。あらためて自分の専門の狭さを認識し、なるほど、これが本当の地球環境問題かと、思うようになってきた。

しかし一方で、こんな浮世離れの専門の私でも、意外と地球研でやっていけるという気がしてきた。それは、ほとんどの人は自分の専門でないことに対してあまりにも晩生だったからである。多少理屈をこねることさえできれば、自分の専門はおいといて、意外と議論もたのしい。さらに、京都という場所には、独特の学問的な雰囲気もあるということがわかってきた。その雰囲気を説明するのは難しいが、京都が生み出してきた数多くの個性的な学者の哲学をひきずりながら、雲をつかむような議論をして、形而上学的なところに結論をもとめたがるというようなものである。この京都という独特な雰囲気の中で、そんな研究所の混沌をたのしむ余裕もできてきた。たしかに、こんな研究所は他にないかもしれない。もともと私自身は雪氷学者とも生物学者ともいえず、いままでも中途半端な存在だった。そんな自分にはこんな有象無象の学者のあつまった研究所があっていたのかもしれない。

茶色いクリオコナイト

さて、オアシスプロジェクトでは、氷河班として中国の氷河を訪れる機会を得た。プロジェクトの事務局の仮面をかぶって、本当にやりたかったのは、この中国の氷河をみることだった。実は私にとって中国の氷河は数年前からとても行きたかったあこがれの氷河だったのである。なぜか？そこには“茶色いクリオコナイト”があると、前から聞いていたからである。あまりにもマニアックなこの動機に自分でも思わずおかしくなるが、少しこの茶色いクリオコナイトについて説明したい。クリオコナイトとは、氷河の表面の氷の上にある泥のような汚れである。当初は氷河周辺の土や砂が風で飛ばされて、氷河の上にたまったものと考えられてきた。しかし、よくみると黒い団子のような1ミリほどのつぶつぶの構造をもっており、これが氷河上で繁殖する微生物によってつくられるものだということがわかった。このつぶつぶは世界中の氷河で見られる構造である。その中で中国の氷河のものは、つぶつぶ構造は同じだが、色が黒ではなく茶色だという。茶色いクリオコナイトは中国にしか見つかっていない。しかし、私は氷河上でまだその茶色いクリオコナイトをみたことがなかった。色なんか黒でも茶色でもどう

でもいいと思われるかもしれない。しかし、実はその色の違いで氷河の解け方も変わるし、中国にしかない氷河の特別な生物の秘密がわかるかもしれないのである。

2002年の8月、ついに中国祁連山の七一氷河に行くことになった。数年ぶりの高山に体の調子もおかしくなったりもしたが、なんとか氷河にたどり着くことができた。そして氷の上には、たしかに茶色いクリオコナイトがあった。アジアの氷河にくること自体、久しぶりだった。アラスカにしばらくいたため、そこのきれいな氷河に見慣れてしまっていたが、やはりアジアの氷河はすごい。ものすごい量のクリオコナイトが氷の上にあり、そしてその色が茶色だ。わたしにとってそれはまばゆい宝石のようだった。しばらく氷河の上でひとり、誰にもわからないであろうその感動につかった。さらにその感動は、妄想につながっていく。この地方の氷河の周囲にひろがる美しい草原は、氷河から流されてきた栄養豊富なクリオコナイトに根をはってできたものともいえる。クリオコナイトがこの草原を作って、遊牧の歴史の舞台を築いたのだ、そんな妄想が低酸素の頭の中をぐるぐるめぐった。

学生時代、指導教官から「君はクリオコナイトの道をきわめてみなさい」といわれた。そんなことをしてなんになるんだろうと思いつつ、一方でその不思議な魅力にはまってきた。たしかに、きわめればきわめるほど、研究というはおもしろくなるものである。そのクリオコナイトの研究に導かれて、アラスカに渡り、そして京都にまでくることになった。京都では、砂漠化の環境問題のプロジェクトにまで関わることになった。ドラえものの道具に「チョージャワラシベ」というものがあつたが、ワラシベがどンドンと化けて自分の欲しい物に近づいていく、クリオコナイトはまさに私のチョージャワラシベである。

今は縁あって大学に移り、こんな私が環境問題の授業も受け持つことになった。オアシスプロジェクトをベースに授業をおこなうと、意外にも学生たちは熱心に授業をきいてくれる。きっと、環境問題の専門家でもない私が、客観的にみながらオアシスの問題の話をするからなのだろう。私の本当の専門がばれたときには、4年間地球研につとめた肩書きで多少はごまかす

ことができるかもしれない。オアシスプロジェクト、とくに地球研での4年間の経験は、私にとってかけがいのないものになった。お世話になりましたオアシスプロジェクト、地球研の皆さんに、深く感謝いたします。

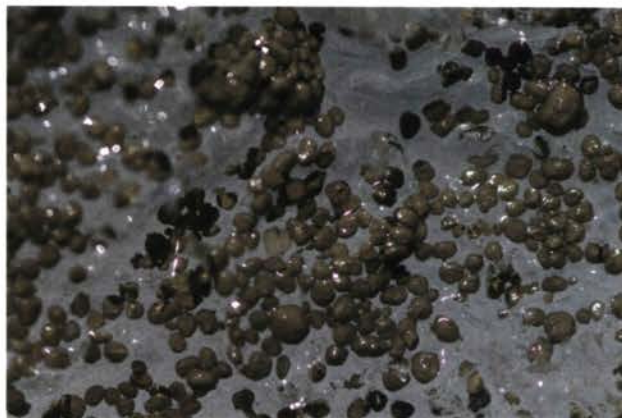


写真1 氷河上のクリオコナイト（つぶつぶの大きさは1ミリほど）